

フィジー共和国ビチレブ島北東部の

植物資源の利用とその伝統的知識

-ナタレイラ村を対象として-

諏訪 楓子

キーワード： フィジー、植物利用、伝統的知識、生活形態、資源管理

1. 背景と目的

フィジー共和国(以下フィジー)には多くの村落がある。そして、人口の都市部への流入が進む一方で、多くのフィジー系住民が村落で生活している。村落では自然環境をうまく利用した自給自足に近い生活が営まれている。また、村落では伝統的な慣習が今でも残っており、この慣習の中には資源管理に関わる制度もある。フィジーの農村部では、このような慣習によって、特に意識されずに豊かな自然環境が維持されてきた¹⁾。しかし、近年、農村部で暮らすフィジー系住民の人口の増加しており、資源利用にも何らかの変化が現れると考えられる。また、フィジーの経済が自然資源に依存していることからフィジーの環境局の報告書では、適切な資源管理の必要性が述べられている²⁾。このような自然資源に依存している地域で適切な資源管理を行うためには、地域住民の生活形態や資源利用の状況を知る必要がある。よって本研究では、フィジー共和国ビチレブ島の北東部沿岸の村において伝承されている有用植物とその利用について調査することにより、地域住民の生活形態と資源利用の状況を把握し、適切な資源管理のための基礎的知見を得ることを目的とした。

2. 調査方法

2012年10月21日～24日と2013年9月11日～10月5日にフィジーのタイレブ(Tailavu)県ダワサム(Dawasamu)地区ナタレイラ(Nataleira)村において植物資源の利用方法とその伝統的な知識について調査を行った。ナタレイラ村での植物の利用方法を明らかにするために、住民が資源利用を行っている村の周辺を含む村内を住民と歩き、そこに生息している植物の現地名、使用部位、利用方法の聞き取りを行った。利用方法が薬草の場合は信じられている健康効果についても聞き取りを行った。主な聞き取り対象者はこの村の村長や畑を所有している住民とその親族である。聞き取り調査で明らかになった植物は写真をもとに南太平洋大学(USP)の植物学者であるMarika Tuiwawa氏に種の同定を依頼するとともに、文献をもとに同定を行った。また、住民の生活形態を明らかにするために、普段の生活方法や村の慣習、収入源などについて会話形式で聞き取りを行った。

3. 結果

調査の結果、現地名で162種類の植物の用途を確認することができ、用途は8項目に分類することができた。また、162種類のうち82種類は複数の用途がある植物であった。使用されている植物の部位は17種類であった。

主な聞き取り対象者に知識の差はあまり見られなかった。この7人のうち1人は高校生であったが、すでに自分の畑を所有しており、植物の知識も6人と大差なく豊富に持っていた。また、一部の住民は植物の利用方法だけでなく、どこにその植物が生息しているかも把握していた。畑仕事に関わったり、周辺の森林やマングローブ林内を遊び場として利用したりと、この村に幼いころから住んでいる住民は、植物の知識を学ぶ機会があることもわかった。

4. 結論

この村では植物資源の利用方法に関する豊富な知識が伝承されている。住民にとって植物資源は身近なものであり、生活する上で必要なものであると言える。村の観光業によって知識の伝承を促し、日常的に使われなくなり利用が偏りつつあった植物資源の新たな利用方法が生み出されている一方で、資源利用が過剰に促進される可能性もある。今後、形態が変わりつつある資源利用に対応するためにも、この村での資源管理の重要性は高まっている。